



2010年
SORA 29号

吾亦紅 (29) | 1

柴田 佐知子

宗像大社五句

菊花展見にゆく細き雨の中

媛神の地に着く懸崖菊の先

末社並ぶ雨の木の実を厚く敷き

勾玉に管玉に冬立ちにけり

銅鏡のみどり全し十二月

枯菊を焚きゐる母が消えてゆく

月光の波打つてゐる大阿蘇野

最終バス残らず人を入れて冬

大空を見ず青空に大根干す

冬帽子

高倉和子

大根の白極りて故郷かな

待つてゐるやうなる母の冬籠

毛布引き寄せ大輪の中に眠る

あつさりと死にたき蒲団干しにけり

着ぶくれて勧められたるままに買ふ

拍手の大きな父や淑気満つ

初みくじ嫌といふほど結ばれて

参道の海に尽きゆく冬帽子

寒鯉の動けば水の汚れけり

枕木の冷えきつてゐる硬さかな

冬花火

中田みなみ

白髪の輝いてゐる社会鍋

トラックに深き睡りの毛糸帽

死ぬときは燃やすつもりの日記買ふ

若菜摘む水の豊かな國に生れ

仏の座摘む鎌倉の海に向き

別荘の庭と気づかず若菜摘む

温泉ゆの町の高浪染めし冬花火

うしろよりぽつぺん吹かれ宿場町

湯冷めして常より近き列車音

庖丁にさつと気の抜け葱の剣



能
笛

荒井千佐代

牡蠣簀の辺りの海の昏さかな

材木市場みな材木や十二月

真つ暗な海を見てゐるクリスマス

去年今年釘も画鋏もささりしまま

灘よりの風のおもて鳥総松

寒紅を濃く荒海に真向かへり

炭の目鼻などはいらんと雪だるま

能笛の一と吹きに冬深みけり

池中につづく飛石ぼたん雪

登四郎亡し翔亡し沖の寒夕焼

大盛りに

服部 早苗

みぞおちは指組むところ寒夕焼

夕暮に残してきたる焚火跡

おほかみの護符ふところに山眠る

みかん半分わけてくれたる手の小さき

楳足して船の着きたることを言ふ

「シッ」と追ふ弱気に強気寒鴉

暗がりや人の灯たのむ狸ある

電波時計受信の確と十二月

急斜面まだ木酩の渋き冬

日短かちりめんじやこを大盛りに



空作品評

柴田佐知子

トラックに深き睡りの毛糸帽 中田みなみ

トラックの高い運転席に沈みこむように熟睡している長距離輸送の運転手であろう。目が覚めるとまたハンドルを握る働く人の姿である。毛糸の主について特に詠まれている訳ではないのに、景が鮮明に見えてくる。「毛糸帽」が動かしがたい存在感を呈している。

夕暮に残してきたる焚火跡 服部早苗

焚火と夕暮はよく見る取り合わせである。それを一步ぬきんでた句としたのは、「残してきたる」という表現である。置き去りにされ黒い焚火跡は次第に闇に沈んでいく。

消防車山火に染まり待機せり 秋 千晴

九州では阿蘇の山焼きがすぐ浮ぶ。阿蘇の草原は冬には枯芒に覆われた山肌となり、うねってどこまでも広がる。以前、手が足りずに山焼きを行わない地域が出たそうだが、数年でその地域は笹など生い

茂りたちまち荒れていったという。牛馬を育てるあの美しい草原は人が手をかけて守り継いだものなのである。今は毎年ボランティアの方々の助けをかりて勇壮な山焼きが行われている。

火付け棒から放たれた火は、あつという間に燃え広がり炎が走り出す。火は風を呼び、風は火を走らせる。竹に葛を編みこんだ火消し棒でうなりを上げて広がる炎を叩きコントロールしながら新しい芽吹きのために山を焼くのであるが、死者をも出す危険な作業である。万が一に備えて待機する消防車。「山火に染まり」という臨場感に充ちた表現が見事。

煤逃げの文楽長き死出の旅 中条さゆり

煤逃げの父酔客を連れてきし あさなが捷

新年を迎えるために年末に家中掃き清める。その「煤払」の際、老人などが一室にこもることを「煤籠」といい、煤払の仕事から逃げ出そうと口実などを設けて家を離れることを「煤逃」と揶揄をこめていう。さて一句目。家では何かと忙しい年末のひと日を費やして煤払いをしているのに、そこを逃げ出して文楽の心中ものを見ているという。

二句目の父は煤逃げを決め込んだ上に酔客まで連れて帰ってきたのである。家でバタバタと立ち働い

た側にすれば、好い加減にしると言いたくならう。
この二句、どちらも面白い。そしてうまい。

名月や真鯛浮きくる五島灘

吉村撰護

月光がくまなくゆきわたる五島灘に浮き上がって
くるのは真鯛。この「真鯛」が実にいい。スケール
が大きく、且つ幻想的な美が醸しだされている。

春浅し泣き黒子ある岬馬

苑 実耶

私がつぐ思い浮かべるのは天然記念物に指定され
た岬馬が生息している宮崎県日南海岸南端の都井岬
である。真冬の海風に吹きさらされて立つ姿などは
印象的である。この句は早春の作。泣き黒子という
な斑があるという馬に心ひかれる。命の健気さまで
伝わってくるのは「春浅し」という季語の効果。

賑はひし市場のあとのふぐと汁

大地真理

朝市か、あるいは魚市場か。さつきまでの賑やか
な雰囲気は潮が引いたように収まり、がらんとした
落ち着きが戻っている。そこで熟々の河豚汁が出来
上がる。この場では寒さも河豚汁のうまさの薬味の
ようである。面白い処を見られたものだ。

昇天の道筋いくつ冬の晴

鳳 蛮華

それぞれが重なることのない人生の軌道を描いて
きたように、昇天の道もまた無数なのかもしれない。
一点の濁りもない真青な冬空なのであろう。

小春日や碁石の音と父の背と

山内 碧

余計な叙述も感情も盛りこむことのない淡々とし
た描出である。しかしこの句にはやわらかな冬の日
差しの中の穏やかな時間が確かに流れている。

初暦災ひのなき白さなり

石川叔子

まだ何の書き込みもない真新しい暦を「災いのな
き白さ」と言い切る断定の強さが新鮮である。

どうでつかどうにもこうも年つまる

田岡千章

かにかくに年も終りぬ我が手見る

田代貞枝

数へ日の子の消息のもどかしき

宮井知英

狐火を信じる人に育てられ

山田正子

寝室へ行くにも杖や秋ふかし

小川 涼

寒の手足足細りて恙なし

ふじの茜

いずれの句も一人一人の息遣いやぬくもりがこ
もっており、触れられるような近さに作者を感じる。

空集

柴田佐知子選

欲しがれば吹いて瓢の実渡しやる

白足袋のすぐに汚れし里神楽

煤逃げの文楽長き死出の旅

自然諸の曲がりくねりて箱の中

干柿の種も細りて尖りぬる

軒を出る紅白の垂れ年の市

福寿草苗札よりも低くあり

堂々と鬼現れし節分会

春の雪丸刈りの子の青かりし

マネキンの腕に二色の春シヨール

冬怒濤灘に敵陣あるごとし

大根の抜けし穴見る園児かな

初富士の裏表なき眺かな

四方の春産湯のごとく身を浸し



鬼ひとり残されてゐる花野かな 福岡 中条さゆり

菊つけぬ木組みの人形据ゑらるる

鉤の手の廊下の軋み時雨来る

田仕舞の煙大きく撓ひけり

糸島 小林朱夏

粕屋 秋 千晴

苦しみの顔となりたる福笑

龍の玉つまむ指先細くして

下りてこず鳴いてばかりの寒雀

名月や真鯛浮きくる五島灘

リヤカーに氏神積んで村祭

不細工に下がつてばかり榎植の実

一湾に突き立つ山や鷹渡る

冬日和蒲団に苔を呉れてやる

屋久島に根を張る冬の銀河かな

字の名を化粧回しに宮相撲

土踏まず土におろして稚児相撲

泣き止まぬまま勝ち名乗り稚児相撲

化粧回し寝かせてつける稚児相撲

秋日濃し軒の重なる漁師町

福岡 吉村摂護

熊本 松田明子

磨り減りし石段浸す秋の潮

秋旱壺にはひらぬ骨砕く

芋洗ふ洗濯板を桶に立て

命綱一本恃む松手入れ

長靴に火事の名残や消防団

這ふ子ゐる泣き出す子ゐる四方の春

春浅し泣き黒子ある岬馬

つかまれてくぼみしままの烏瓜

凍滝や人は神へと祀られし

意に添はぬ娘でありし白菜漬く

寒鰯の玄海の荒れつれてきし

捨てしこと悔いてはをらずマフラー巻く

海の色脱ぎて揚がりし桜鯛

手足神草履残して発ち給ふ

須恵 苑 実耶

福岡 柴田志津子